偶像礼拝

「恐れてはならない。あなたがたは、このすべての悪を行った。しかし【主】に従い、わきにそれず、心を尽くして【主】に仕えなさい。役にも立たず、救い出すこともできないむなしいものに従って、わきへそれてはならない。それはむなしいものだ。」(サムエル記第一 12:20-21)

偶像礼拝の実体

偶像礼拝は偶像や画像、そのほかの神々の代役(まことの神の代りとするもの)を礼拝することである。それはイスラエル民族の歴史を通して繰返し行われた神に対する重い犯罪であり罪である。最初に記録されている例はヤコブ(イスラエルと改名 創32:28)がベテルに到着する直前、家族全員に異国の神々を取除くように命令したときのことである(創35:1-4)。聖書の中で、イスラエル民族全体が偶像礼拝をした最初の記録はモーセがシナイ山に登っていたときに金の子牛を作り、集まって拝んだときのことだった(出32:1-6)。士師の時代にはしばしばにせの神々に引かれて偶像礼拝に参加した。サウルとダビデの時代には偶像礼拝が行われていたという証拠はないけれども、ソロモン王の治世の晩年にはイスラエルに偶像礼拝が継続していた情況が見られる(Ⅰ列11:1-8)。ソロモンの治世の終りにイスラエルの王国は分裂した(王国が分裂した背景と詳細 →Ⅰ列緒論, Ⅱ列緒論, Ⅱ歴緒論, →Ⅰ列12:-14:, Ⅱ歴10:-11:, 要約と図解 →「**イスラエルとユダの王国**」の地図 p.570)。分裂のあとで北のイスラエル王国の王はみな偶像礼拝をしたけれども南のユダ王国の多くの王も同じだった。ユダヤ人の間で異国の神々への礼拝が行われなくなったのは捕囚から帰還したあとだった(ユダの捕囚はユダヤ人が70年間バビロンに追放または強制的に移住されて捕虜になったことを指す, 捕囚の概要 →Ⅱ列緒論, エズ緒論, →「**ユダ(南王国)の捕囚**」の地図 p.633, 「**捕囚からの帰還**」の地図 p.759)。

偶像礼拝の魅力

イスラエル人にとって偶像礼拝はなぜ魅力的だったのだろうか。それには次のような要素が関連している。

(1) イスラエル人は異教の民族(神を敬わない、いろいろなかたちの多くのにせの神々に従っている人々)によって取囲まれていた。異教の信仰者は一人の神を礼拝するより多くの神を礼拝するほうが勝っていると考えていた。「多ければ多いほうが良い」ということである。イスラエルは自分たちを聖く(道徳的、霊的に純粋で、神に献身している)保つようにとの神の命令に従わないで、いつも周りの民族の邪悪な宗教的慣習や生活様式をまねし続けた。

(2) ほかの民族の神々はイスラエルの神が要求したような服従と道徳的清さを要求しなかった。たとえば異教の宗教の多くは宗教儀式の一部分に神殿娼婦との性的不道徳を含めていた。この慣習は多くのイスラエル人の関心を引くようになった。けれども神は神との救いの関係を維持するために、律法に定められた高い道徳基準に従うことを人々に要求された。異教の宗教が容認して実践している不道徳やほかの罪深い慣習に引付ける力は退けるべきだった。

(3) 偶像は悪魔的性格を持っているので(→次の項)、時には礼拝をする人々の気を引くような結果を生み出すことがあった。悪魔的な力が一時的に物質的、肉体的恩恵を与えることがあったのである。豊穣の神々は出産を約束し、天候の神々(太陽、月、雨など)は豊かな収穫のために適切な条件を約束し、戦争の神々は敵から守られて戦いに勝利することを約束した。このような「利益」はイスラエル人にとって魅力的で、多くの人は偶像礼拝に励むようになった。

偶像礼拝の本質

偶像礼拝の魅力は偶像礼拝の本質を理解しなければ十分に理解することができない。

(1) 聖書は偶像それ自体は無であることを明らかにしている(エレ2:11, 16:20)。偶像は人間の手で彫った単なる木や石の破片にすぎない。それ自体には何の力もない。サムエルは偶像を役に立たないものと呼び(Ⅰサム12:21)、パウロも「私たちは、世の偶像の神は実際にはないものであること・・・を知っています」(Ⅰコリ8:4, ⇒10:19-20)とはっきり言っている。偶像は価値がないことから、詩篇の作者(詩115:4-8, 135:15-18)や預言者(Ⅰ列18:27, イザ44:9-20, 46:1-7, エレ10:3-5)は偶像をしばしば侮りあざ笑って、それに頼ることがどんなにこっけいであるかを指摘している。

(2) けれどもにせの神々の偶像の背後には悪霊(悪魔に支配された霊的存在)がいる。モーセも(→申32:17注)、詩篇の作者も(詩106:36-37)、ともににせの神々と悪霊は同じであると宣言している。パウロは新約聖書のコリント人への手紙の中で、偶像にささげた肉を食べることについて、「彼らのささげる物は、神にではなくて悪霊にささげられている」と同じことを言っている(Ⅰコリ10:20)。偶像礼拝の背後にある力はこの世界で大きな影響力を持っている悪霊の力であり活動なのである。もちろんキリスト者はイエス・キリストの力は悪霊の力よりも無限に強いことを知っている(「**サタンと悪霊に勝利する力**」の項 p.1726)。それでもなお聖書は、サタンは「この世の神」(Ⅱコリ4:4)であり、今日の世界で大きな力を働かせていると示している(→Ⅰヨハ5:19注, ⇒ルカ13:16, ガラ1:4, エペ6:12, ヘブ2:14)。サタンはにせ(本物とそっくりに見えるもの)の奇蹟、しるし、不思議を生み出し(Ⅱテサ2:9, 黙13:2-8, 13, 16:13-14, 19:20)、ある人々に肉体的、物質的恩恵を与える力を持っている。そして時にはよこしまな人々が物質的利益や繁栄を得るようにさせていることが確かである(⇒詩10:2-6, 37:16, 35, 49:6, 73:3-12)。

(3) 異教の宗教的慣習が交霊術(死者からのメッセージを受ける)、魔術(悪霊による魔術)、占い(未来を予言する)、妖術(のろいをかける)、魔法(魔術を行う)と密接に結び付いていることを知ると、偶像礼拝と悪霊との関係がいっそう明らかになってくる。これらの慣習は(このほかにもあるが)神を敬わない霊的な力や死者と交流して力を受け隠されていたことを知り、将来を決定しようとするものである(⇒Ⅱ列21:3-6, イザ8:19, →申18:9-11注, 黙9:21注)。聖書によればこのようなオカルトの慣習はみな悪霊を礼拝して敬意を払うことに関係している。たとえばサウロがサムエルを死者の中から呼出してほしいと頼んだとき、エン・ドルの口寄せ女はサムエルとされる霊が「地から上って来」るのを見て(Ⅰサム28:8-14)驚いた。それは悪霊が地下の世界から上ってくると予想していたからである(→Ⅰサム28:12注)。

(4) 新約聖書はむさぼりが偶像礼拝の一つのかたちだとしている(コロ3:5)。それは人々が神よりも富と力を愛し求めるからである。実際にこれらのものはその人の「神」になる。けれどもさらに深い霊的レベルで、悪霊はある程度の物質的利益を提供することができる。それで自分の持っている物で満足しない人々は、ほしいものを得させてくれる腐敗した悪の霊とためらうことなく妥協し自分を「売渡す」のである。そういう人々は木や石で作った神々を礼拝しないかも知れないけれども、実際はむさぼりと悪い欲望の背後にいる悪霊を礼拝しているのである。主イエスはだれも「神にも仕え、また富にも仕えるということはできません」と警告された(マタ6:24)。同じことについてパウロも後に「主の杯を飲んだうえ、さらに悪霊の杯を飲むことは、できない」と信仰者に警告をしている(Ⅰコリ10:21)。

偶像礼拝に対する神の反応

神はどんなかたちの偶像礼拝も容認されない。

(1) 神は旧約聖書の中でしばしば警告をされた。

(a) 十戒で最初の二つはイスラエルの神、主以外のどんな神、どんなものも礼拝することに真っ向から反対している(→出20:3-4注)。

(b) このような指示を神は何度も繰返しておられる(出23:13, 24, 34:14-17, 申4:23-24, 6:14, ヨシ23:7, 士6:10, Ⅱ列17:35, 37-38)。

(c) ほかの神々に仕えてはならないという命令と関連して、カナンの地にある異教の偶像や石像を全

部破壊することが命令されていた(出23:24, 34:13, 申7:4-5, 12:2-3)。

(2) イスラエル民族の歴史はほとんどが偶像礼拝の歴史だった。神はご自分の民が約束の地で偶像を破壊しきらないで、むしろ人間が作ったにせの神々の礼拝を受入れたことに対して非常に怒られた。そして敵の国に支配されるという罰を下された。

(a) 士師記にはしばしば繰返される次のような循環が描かれている。まず滅ぼすことができなかったその土地の民族のにせの神々にイスラエル人は仕え始めた。次に神は敵の民族が力を振うことを許された。最後に人々は助けを求めて主に叫んだ。そこで主は聞いて救うために士師を送られた。

(b) 北王国の偶像礼拝はほとんど200年にわたって続けられた。ついに神はアッシリヤ人がイスラエルの首都を破壊し10部族を散らすことを許された(Ⅱ列17:6-18, →「**イスラエル(北王国)の捕囚**」の地図 p.633)。

(c) 南王国ユダにはヒゼキヤやヨシヤのような忠実で神を敬う王が多くいた。けれどもマナセのようなよこしまな王によって偶像礼拝はユダ王国の日常生活で一般的に受入れられるようになってしまった(Ⅱ列21:1-9)。その結果神は預言者たちを送って、エルサレムも滅ぼされると警告された(Ⅱ列 21:10-16)。このような警告にもかかわらず偶像礼拝は継続した(→イザ48:4-5, エレ2:4-30, 16:18-21, エゼ8:)。そしてついに神はバビロンのネブカデネザル王を通してご自分の預言を成就された。ネブカデネザルはエルサレムを占領し、神殿を焼き、町にある貴重なものを全部破壊してしまった(Ⅱ列25:, →「**ユダ(南王国)の捕囚**」の地図 p.633)。

(3) 新約聖書もキリストに従う人々に偶像礼拝の警告をしている。

(a) 偶像礼拝は今日、いろいろなかたちで見ることができる。それは世界にあるにせの宗教の中にも、魔術(悪霊による魔術)や悪魔礼拝(サタン礼拝)、そのほかのオカルトの中にも明らかに現れている。また人々が神にだけ頼らないでむさぼりと物質主義に身をゆだねるところに現れている。実際に偶像礼拝とは人々の生活の中で最優先にするはずの神の立場を何かがとって代ることを指すのである。もし救いと祝福を体験しながらこの世界の不道徳とよこしまな慣習にも参加できると思うなら、それは最終的には教会の中でも起こることである。

(b) したがって新約聖書はむさぼってどん欲になり不道徳にならないように(コロ3:5, ⇒マタ6:19-24, ロマ7:7, ヘブ13:5-6, 「**富と貧困**」の項 p.1835)、あらゆる種類の偶像を避けるように私たちに警告をしている(Ⅰコリ10:14, Ⅰヨハ5:21)。どんなかたちでも偶像礼拝にふける人々は神の国を相続できないことを神は明らかにしておられる(Ⅰコリ6:9-10, ガラ5:20-21, 黙22:15)。